

刑事施設の結核対策シンポジウムに参加して

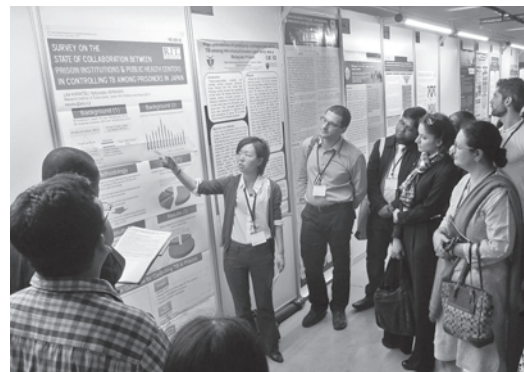
結核予防会結核研究所

臨床・疫学部 河津 里沙

今回、日本の刑事施設における結核対策について発表を行うと同時に、刑事施設における結核の研究や対策上の課題について最新の動向を学ぶことを主な目的として第45回世界結核肺疾患連合会議に参加した。

今学会では刑事施設の結核対策を一つのテーマとして取り上げたシンポジウムが一件、また刑事施設の結核に焦点を絞ったポスターセッションが一件あり、刑事施設被収容者が依然として結核対策上の重要なハイリスク者であることが伺われた。シンポジウムの内容は“*How multi-sectoral approach and community engagement may strengthen programmatic management of TB in prisons*” (10月30日 08:00~10:00: Symposium session no. 00182) というタイトル通り、府省間や官民連携は勿論、NGOや地域住民、そして受刑者ら自身の参画の重要性を強調したものであった。同シンポジウムでは5カ国からの発表と赤十字国際委員会からの活動報告があり、例えば南アフリカでは保健省と法務省が協働で受刑者に対するエイズ・結核教育プログラムを行っていること、またザンビアやハイチでは刑事施設の結核対策に刑事施設職員の参画を促進するために、職員に対する研修を実施していることなどが報告された。

筆者はTB in prisons (11月1日 12:45~13:15: Session no. 66) というセッションで発表を行った。筆者以外の発表は全て結核高まん延国を対象としたものであったが、早期発見のための積極的なスクリーニングや出所後の支援など課題は共通したのが多い。そしてそれらに対する取り組みを可能とするのもやはり様々な形の「連携」であった。組織の垣根を越え、まずは話し合いのテーブルにつくことが対策の第一歩だと改めて実感した。



セッションで発表する筆者